

〔論文〕

保育者養成校におけるチーム制実践的演習授業について(1)

大嶋 健吾・芝田圭一郎

1. はじめに

平成27年4月より、内閣府・文部科学省・厚生労働省から示された「子ども・子育て支援制度」が本格的に始動している。日本国内における幼児教育・保育制度もそれに応じて変化し始めている。しかし、当の保育現場¹⁾では制度上の変化はあるものの、現場で働く幼稚園教諭や保育士の業務等に変化が見られていないのが実状である。そして保育士不足問題や保育の質の向上等の課題に対しては大きな効果が出ていない。そこで本研究では保育士だけではなく保育の質の向上という課題に着目し、保育者²⁾養成校での保育の質を向上させる授業について研究することにした。

筆者は2人とも保育現場にて保育業務に携わり、保育現場について精通している。そしてその保育経験を活かし、現在、保育者養成校にて教鞭をとっている。2人の筆者が担当している「保育内容（総論）」という授業にて、保育の質の向上につながる授業を展開することにした。保育の質の向上という課題は一言で言い表せないほど問題が山積みである。その中でまず、保育業務の「担任業務」に着目した。現在の保育現場では「児童福祉施設最低基準」等に基づき、子どもの年齢と人数によって保育者の配置が決まっているものの、現状としてはその多くが「複数担任制（チーム制）」を実施している。先行研究において「複数担任制（チーム制）」における利点は「安全面の確保」「保育の充実」「保育の幅が広がる」等とあがっているものの、問題点として「保育士同士の連携・共通理解・話し合い等で困難を感じる」という点が浮き彫りになっている³⁾。この点に関しては保育者それぞれの「保育観」が大きく影響しているように思われる。「保育観」とは各保育者が抱く、理想の保育の形であり、乳幼児に対する保育のねらいであり、そして保育そのものに対する考え方というものであるが、簡単にかつ、一言で言い表せない。「保育観」は保育者養成の授業において大きな役目を担っており、授業を通して、学生一人ひとりに「保育観」を形成していくことも求められている。この「保育観」は保育者がそれぞれ抱いているので、その違いや根本において差が生じる。この違いが先行研究における、「保育士同士の連携・共通理解・話し合い等で困難を感じる」という問題点につながっていると推察する。このように「複数担任制（チーム制）」は保育現場において主流ながらも、当の保育者は連携を取る点で困難に感じているようなので、「複数担任制（チーム制）」をどのように実施していくかという点を授業内容に組み込むことにした。実際に2人の筆者がチームとなって授業を展開していく。特に筆者は2人とも専門領域が近いこともあるので、「複数担任制（チーム制）」がどのようなものであるか、実際に様子を観ることで理解しやすいと考えられる。

次に、保育業務は多岐に渡っていること、また「保育内容（総論）」という授業が保育内容の5

領域を越えて広い領域を押さえる科目であることを踏まえ、「模擬保育」を導入することにした。保育業務は単に「子どもを保育する」というわけではない。日々の保育の中に様々な内容が含まれているが、実践的に学ぶ授業は少ない。保育者養成においてはそれぞれの専門的知識や技術を得る授業が多く、それら得た知識や技術を総合的に実践する科目が少なく、また保育現場の様子を一番に学べる学外実習も時間的かつ内容的に多いとは言えない。そこで様々な専門科目から得た知識や技術を使い、実際の保育に近い環境を授業内で設定し、学生に模擬で保育を実践するようにした。それが「模擬保育」である。

以上から「複数担任制（チーム制）」、「模擬保育」の2点を主として「保育内容（総論）」を展開しつつ、保育者の質の向上につながる授業を目指すことにした。この「保育内容（総論）」という科目は本校において2年生前期開講の半期科目である。本校では2年次に「教育実習Ⅱ（幼稚園）」、「保育実習Ⅱ（保育所）」の学外実習が実施されている。学外実習は保育現場に実際に赴いて学ぶ機会であるので保育者の質の向上につながったかどうかを検証するにふさわしい場である。よって全授業終了後、受講した学生にアンケートを実施し、学外実習への効果や卒業後の意欲等にどのような影響がでているかを調査した。

2. 授業内容及びその展開

(1) 授業内容の展開

ここでは「保育内容（総論）」の授業内容の展開について時系列に沿いながら紹介する。前述にもあるように今回は「複数担任制（チーム制）」と「模擬保育」の2点に着目しており、授業内容の展開についてもこの2点を重視して進めている。その上で授業の主である学生の模擬保育実施の前に筆者2名による複数の保育者による模擬保育を学生に実施した。詳細については下記に記していく。約40名で1クラス（全3クラス）編成となっており模擬授業は約14グループが実施することとなり1つのグループの模擬保育に与えられる時間は原則20分とした。

(2) 筆者の模擬保育

学生の模擬保育実施前に筆者2名による模擬保育を実施した。模擬保育を実施するには学生を子ども役としているが、実際の乳幼児のような反応や動き、言葉等を実践できるわけではない。また実際の保育現場においても乳幼児を35名以上のクラス編成をして、保育を実践することはまず、ありえない。よって実際の保育現場からはかけ離れている点もある。今回はそういった点は不問とする。保育内容としては、①リトミック、②体操指導、③造形、④室内ゲーム（今回、詳細は省略）を行う。その際のポイントは3つ。

*筆者2名は、子ども役の学生が複数の保育者による保育を体験することができるよう、主になり保育を進めていく主担と、サポートを主とする補助の役に別れて模擬保育を行う。

*学生には各模擬保育対象年齢の発達過程を伝える、教材の使用等、他授業との関連性を意識でき

るよう努める。

*必ず保育後の振り返りを学生へ講義という形で考慮する必要がある点を伝える。

(3) 学生の模擬保育

まず初めにランダムに選ばれた学生同士が数名(3～4)で1グループとなり、模擬保育の内容(テーマ)を決める所から取り組みが始まり、擬似複数担任制を構成しPDCAサイクルを踏まえチームで保育内容を考え実施し評価、改善していく形をとる。

ここでの保育内容とは養成校の学生が実習等で取り組むことが多い設定保育に限定とし、①対象年齢、②実施時期(月別)、③保育の種類(造形・室内ゲーム・リズム・先生が演じるもののいずれかとする)、④実施時間(20分)の4つの条件を踏まえて配慮の上で内容を考え実習時に使用する指導案に記入する。「複数担任制(チーム制)」における課題の一要因として考えることのできる、保育業務終了時間のギャップからくる打ち合わせや引継ぎ時間の確保の難しさ、モチベーションや保育自体に対する力のベクトルの違いなど、保育観と呼ばれるような物の相違等に近い関係性が学生同士の間でも生まれることとなり、多くの学生は、ここで現在の保育現場においても課題の1つとしてもあがっている保育者同士の連携の難しさを実感することになったと考える。ここまではPDCAサイクルにあてはめてみると、一番初めの「Plan(計画)」の部分にあたる所となる。

次に「Do(実施)」の部分である。模擬保育実施当日には先ほど記入した指導案を他学生にも配布の後、保育を開始する。なお、模擬保育実施対象グループ以外の学生が子ども役として模擬保育に参加すること、子ども役の学生には各年齢の設定保育時において見られるであろう動きを考えさせるとともに、筆者からも各年齢の大きな発達過程を伝えることで、「1つのクラス」という擬似クラスを構成し、出来る限り実際の現場に近い環境で模擬保育ができるよう配慮した。模擬保育を開始すると、終了するまで途切れることなく行うことでより実践に近い形となる。

模擬保育実施後には筆者2名が考察を述べる。この考察と実際に模擬保育を行った対象学生の考察を含めまとめる。ここが「Check(評価)」の部分にあたると考える。

今回の模擬授業では、各クラス14グループ前後の模擬保育が行われ、設定された保育内容において必然的に類似性が見られることとなり、参考点があらゆる場面から出てくることとなる。子ども役として他の模擬保育から感じたこと、筆者や実施学生の考察等から担当する模擬保育へのヒントを探し出すことが、PDCAサイクル最後の「Action(改善)」の部分に相当する。

3. アンケート調査及びその内容

以下が受講した学生に実施したアンケートである。他の調査研究のアンケートも兼ねているため、本研究では「Q13」からの質問事項が対象である。各質問項目についての回答の数値は5段階で質問しており、数値が高いほど、肯定的な回答になっている。

図表1 アンケート調査用紙

「幼児教育・保育」に関するアンケート調査

学年 番号 名前 月 日

幾つかのジャンル(分野)に関して聞きます。直感でもいいのでできるだけ全ての質問に教えてください。

■素話・落語に関して

1. 子どもや大人に対して素話または落語を実施したことがありますか？ はい ・ いいえ
※実習以外も含みます。例 就職試験、ボランティア、バイトなど

2. 「はい」の方はいつ、どのような機会で行いましたか？ ※簡単に結構です

【

】

3. 「はい」の方はどのような内容を実施しましたか ※簡単に結構です

【

】

4. 落語に関する教材(絵本・紙芝居など)や素話に興味がありますか？ はい ・ いいえ

5. 実際に子どもの前で子ども落語や素話を実践したいと思いますか？ はい ・ いいえ

6. 質問5の答えの理由をお答えください ※簡単に結構です

【

】

7. 落語や素話が自分の保育に役立つと思いますか？ ※直感でお答えください

役立つ ・ 役立たない

8. 質問7の答えの理由をお答えください ※簡単に結構です

【

】

■実習に関して

9. これまで、実習(教育・保育)に何回行きましたか？

回

10. これまでの実習で責任実習(設定保育)は実施しましたか? ※指導案を書いた設定保育を指します

はい ・ いいえ

11. 質問10で「はい」だった方は何回、実施しましたか?

回

12. 質問10で「はい」だった方はその内容と回数を全て、簡単にいいので、お答えください。

※記入例 手遊び5回、絵本読み3回、造形活動2回 など

【

】

■保育内容(総論)の講義に関して

専門性が近い2人教員によるチーム制のこの講義形式についてお聞きます。そう思う場合は高く、そう思わない場合は低く答えてください。またその理由も簡潔でもいいのでおこたえください。

●前半に実施した講義(座学)について

そう思う



そう思わない

13. この講義の内容はわかりやすかった	5	4	3	2	1
14. 講義の内容は自分のためになった	5	4	3	2	1
15. 講義の内容はとても活かせる	5	4	3	2	1
16. 講義の内容はとても参考になった	5	4	3	2	1

●教員が実施した模擬保育(1人2回ずつ、計4回)について

17. 教員の模擬保育の内容はわかりやすかった	5	4	3	2	1
18. 教員の模擬保育は自分のためになった	5	4	3	2	1
19. 教員の模擬保育はとても活かせる	5	4	3	2	1
20. 教員の模擬保育はとても参考になった	5	4	3	2	1

	5	4	3	2	1
<p>●学生(自分以外)が実施した模擬保育について</p> <p>21. 模擬保育への助言はわかりやすかった</p> <p>22. 他人の模擬保育は自分のためになった</p> <p>23. 他人の模擬保育はとても活かせる</p> <p>24. 他人の模擬保育はとても参考になった</p>					
<p>●学生(自分自身)が実施した模擬保育について</p> <p>25. 模擬保育は簡単だった</p> <p>26. 実施した模擬保育への助言はわかりやすかった</p> <p>27. 実施した模擬保育は自分のためになった</p> <p>28. 実施した模擬保育はとても活かせる</p> <p>29. 実施した模擬保育はとても参考になった</p>					
<p>●その他①</p> <p>30. 保育系の職に就くことに前向きになった</p> <p>31. 実習に対しての不安が減った</p> <p>32. 他の授業に対する気持ちが高まった</p> <p>33. 他の授業の関連性を感じた</p>					
<p>●その他② ※以下の質問には記述もお答えください</p> <p>34. 教員2人の考えや保育観の違いを感じた</p> <p>35. その理由を教えてください</p>					

36. 6月の教育実習でこの講義内容は活かした 5 4 3 2 1

37. それはどのような点ですか？

【

】

38. 9月の保育実習にこの講義内容を活かしたい 5 4 3 2 1

39. それはどのような点ですか？

【

】

40. この講義は教員2人体制がよいと思う 5 4 3 2 1

41. それはどうしてですか？

【

】

42. この講義で卒業後に活かせる内容を思いつく限り答えてください

ご協力ありがとうございました
大嶋 健吾
芝田 圭一郎

4. アンケート調査結果

(1) 調査結果の一覧

回答数：121 有効回答数：104

回答の全体平均値：4.2 回答の全体中央値：4.2

以下が全ての質問の回答数値を表した一覧表とそのグラフである。自由記述で答える質問項目は省いており、後述する。

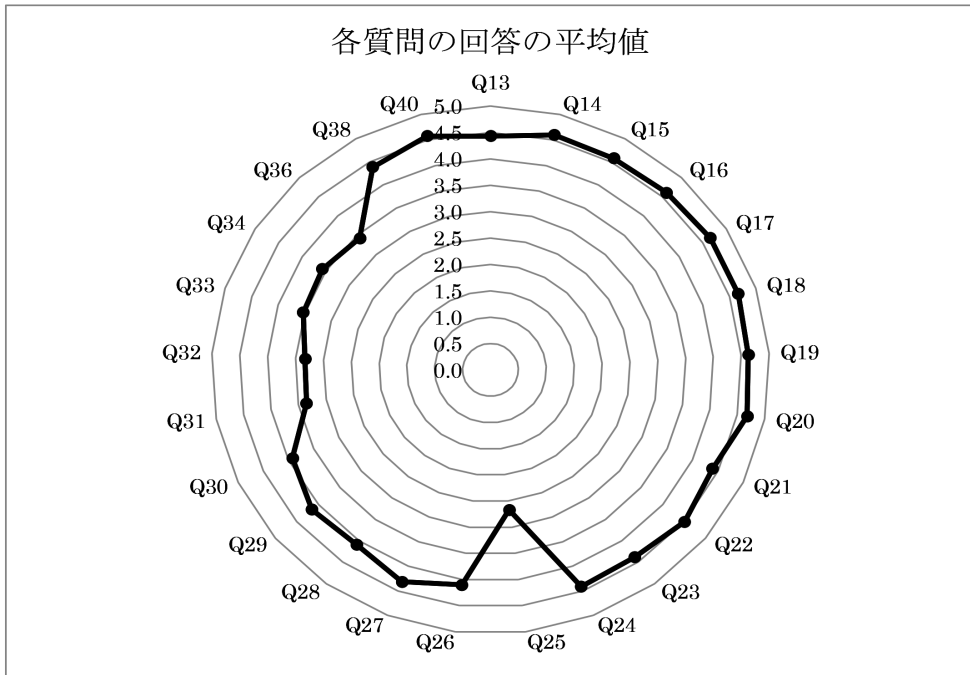
図表2 回答数値の一覧表①（平均値・中央値・最頻値・最小値・最大値）

	平均値	中央値	最頻値	最小値	最大値
Q13	4.43	5	5	3	5
Q14	4.60	5	5	3	5
Q15	4.58	5	5	3	5
Q16	4.61	5	5	3	5
Q17	4.66	5	5	2	5
Q18	4.66	5	5	3	5
Q19	4.63	5	5	3	5
Q20	4.68	5	5	3	5
Q21	4.39	5	5	2	5
Q22	4.51	5	5	3	5
Q23	4.38	4.5	5	1	5
Q24	4.41	5	5	2	5
Q25	2.67	3	2	1	5
Q26	4.11	4	5	1	5
Q27	4.32	4.5	5	1	5
Q28	4.09	4	5	1	5
Q29	4.15	4	5	1	5
Q30	3.92	4	5	1	5
Q31	3.36	3	3	1	5
Q32	3.33	3	3	1	5
Q33	3.53	3.5	3	1	5
Q34	3.57	4	4	1	5
Q36	3.42	3	3	1	5
Q38	4.38	5	5	2	5
Q40	4.58	5	5	3	5

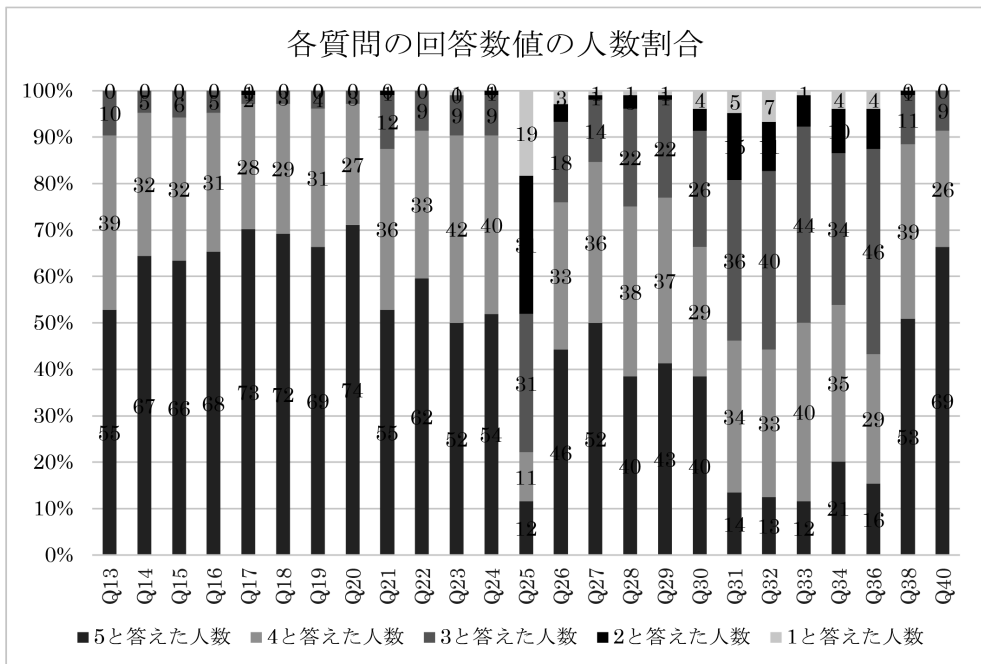
図表3 回答数値の一覧表②（各質問の回答を答えた人数とその割合）

	5と答えた人数		4と答えた人数		3と答えた人数		2と答えた人数		1と答えた人数	
Q13	55	53%	39	38%	10	10%	0	0%	0	0%
Q14	67	64%	32	31%	5	5%	0	0%	0	0%
Q15	66	63%	32	31%	6	6%	0	0%	0	0%
Q16	68	65%	31	30%	5	5%	0	0%	0	0%
Q17	73	70%	28	27%	2	2%	1	1%	0	0%
Q18	72	69%	29	28%	3	3%	0	0%	0	0%
Q19	69	66%	31	30%	4	4%	0	0%	0	0%
Q20	74	71%	27	26%	3	3%	0	0%	0	0%
Q21	55	53%	36	35%	12	12%	1	1%	0	0%
Q22	62	60%	33	32%	9	9%	0	0%	0	0%
Q23	52	50%	42	40%	9	9%	0	0%	1	1%
Q24	54	52%	40	38%	9	9%	1	1%	0	0%
Q25	12	12%	11	11%	31	30%	31	30%	19	18%
Q26	46	44%	33	32%	18	17%	4	4%	3	3%
Q27	52	50%	36	35%	14	13%	1	1%	1	1%
Q28	40	38%	38	37%	22	21%	3	3%	1	1%
Q29	43	41%	37	36%	22	21%	1	1%	1	1%
Q30	40	38%	29	28%	26	25%	5	5%	4	4%
Q31	14	13%	34	33%	36	35%	15	14%	5	5%
Q32	13	13%	33	32%	40	38%	11	11%	7	7%
Q33	12	12%	40	38%	44	42%	7	7%	1	1%
Q34	21	20%	35	34%	34	33%	10	10%	4	4%
Q36	16	15%	29	28%	46	44%	9	9%	4	4%
Q38	53	51%	39	38%	11	11%	1	1%	0	0%
Q40	69	66%	26	25%	9	9%	0	0%	0	0%

図表4 各質問の回答の平均値のグラフ



図表5 各質問の回答数値の人数割合のグラフ



(2) 自由記述の回答項目

自由記述で回答を求める質問は5項目ある。まず、「Q35」である。これは前質問項目の「Q34. 教員2人の考えや保育観の違いを感じた」の理由を聞いた質問である。104の回答中、85の記述があり、「Q34」の数値が低く答えた学生は、「わからない」、「感じなかった」、「似ている」と多く記述回答している。反対に高く答えた学生は「助言（アドバイス）」、「考え方」という2点で違いを感じると多く回答し、38もの記述があった。それ以外に「経験の差」、「視点」という記述があった。

次に「Q37」、「Q39」である。これらはそれぞれ前質問項目で「Q36. 6月の教育実習でこの講義内容は活かせた」、「Q38. 9月の保育実習にこの講義内容を活かしたい」を聞いており、その内容をそれぞれ自由記述で回答している。それぞれの記述回答にあるキーワードを抽出し、比較しやすいように表に表したものが以下の表である。

図表6 「Q37」「Q39」のキーワード増減表

	Q37 (6月実習に対して)	Q39 (9月実習に対して)	増減
声かけ・子どもへの対応	7	13	+6
造形活動	2	1	-1
指導案	8	3	-5
模擬保育	16	56	+40
絵本	7	1	-6
保育の導入・流れ	8	13	+5
乳幼児の発達特性	4	15	+11
子どもの主体性	1	0	-1
日誌	3	1	-2
チーム制	1	2	+1
教員の助言	0	12	+12
心構え	0	1	+1

そして「Q40. この講義は教員2人体制がよいと思う」という質問に対する理由を聞いたのが「Q41」である。同様に、その記述回答からキーワードを抽出したものが以下の表である。

図表7 「Q41」の回答キーワード表

Q41			
2人の違う意見・助言が聞くことができる	71	わかりやすい・聞きやすい	4
安心できる・頼りがいがある	7	担当教員を増やしてほしい	3
教員の経験	6	楽しい	2
チーム制を学べる	6	自由に取り組みやすい	1
教員の保育観を学べる	6	質問しやすい	1

最後に「Q42. この講義で卒業後に活かせる内容を思いつく限り答えてください」である。この回答記述から同様にキーワードを抽出したものが以下の表である。特に「設定保育」という回答の中に「教員の模擬保育」と「学生の模擬保育」とはっきりと記述したものもあるが、単に「模擬保育」という記述もある。その点は分けるように表した。

図表8 「Q42」の回答キーワード表

Q42			
模擬保育	63	(この内、教員の模擬保育)	36
		(この内、学生の模擬保育)	16
保育観・保育のアイデア			24
言葉がけ・援助・導入などの技術論			21
指導案・日誌			10
乳幼児の発達特性			8
保育への心構え			5
教材研究			4
複数担任・チーム制			3
その他			4

5. 調査結果からの考察

(1) Q13～24について

今回のアンケート調査から、「Q13. この講義の内容はわかりやすかった」、「Q14. 講義の内容は自分のためになった」、「Q15. 講義の内容はとても活かせる」、「Q16. 講義の内容はとても参考になった」、「Q17. 教員の模擬保育の内容はわかりやすかった」、「Q18. 教員の模擬保育は自分のためになった」、「Q19. 教員の模擬保育はとても活かせる」、「Q20. 教員の模擬保育はとても参考になった」、「Q21. 模擬保育への助言はわかりやすかった」、「Q22. 他人の模擬保育は自分のためになった」、「Q23. 他人の模擬保育はとても活かせる」、「Q24. 他人の模擬保育はとても参考になった」、以上の質問項目は図表2・3から、回答の数値が高い結果となった。これらの質問の回答の数値だが、全体平均の「4.2」を大きく超えており、中央値もほぼ全てで「5」を、また最小値もほぼ全てで「3」となっている。そして回答した人数の割合からも「5」と回答した学生は半数（50％）以上いる。この結果から、この「保育内容（総論）」という授業は学生にとって大きな学びとなっていることを示している。まず、「Q13～16」ではこの授業について質問しているが、これらの項目は上記の通り数値が高い。これらから、この授業内容が学生にとって価値のある授業であったことがわかる。そして、「Q17～20」の回答からも教員ら（筆者ら）が実施した模擬保育も大きな成果となっている。さらに、「Q21～24」の回答からも自分以外の学生が実施した模擬保育がとても参考になっ

ていることがわかる。これらから、「模擬保育」というこの授業での主たる活動内容が、学生にとって大きな成果、学びになっていることを示している。

(2) Q25～29について

ここまでの質問に対する回答の数値は高かったが、「Q25～29」は「Q13～24」に比べると平均値、中央値ともに低いものとなっている。まず「Q25. 模擬保育は簡単だった」という質問に対しては平均値が「2.67」、中央値が「3」となっている。また「5」と回答した割合は12%、「4」と回答した割合は11%となり、全質問項目の中で最も数値が低い結果となった。この結果及び、前述した結果からは、筆者らの模擬保育や他人の模擬保育は参考になるものの、自分がするとなると困難に感じていることがわかる。ただ、「Q26. 実施した模擬保育への助言はわかりやすかった」、「Q27. 実施した模擬保育は自分のためになった」、「Q28. 実施した模擬保育はとても活かせる」、「Q29. 実施した模擬保育はとても参考になった」という4つの質問項目は「Q25」に比べると高い結果となっている。前述した質問結果ほどではないが、全体平均の「4.2」とほぼ同じ結果となっている。これらのことから、自分が行う模擬保育に対して困難などの後ろ向きになっているわけではない。模擬保育に対する筆者らの助言や模擬保育を実施した経験は活用でき、今後活かせると考えている。ただ、自分自身で模擬保育を実施する、という点においてのみ困難や不安に感じていると思われる。この学生が抱えている困難や心配、不安といったものの要因は一人ひとり違うものと考えられる。その点をクリアにしていくことも「模擬保育」という活動を授業に取り入れる上での大きな課題となるだろう。

(3) Q30～33、Q36～39について

この授業を受けての心境等の変化について聞いた。保育者養成校での学生は実習に対して大きな期待と同じ程度とても多くの不安を抱いている⁴⁾。その数々の不安の中でも、この授業で実施する模擬保育の様に、実際の保育現場で乳幼児を対象に保育活動を実践したり、その保育現場での担任保育者と連携を図ったりと、プロの保育者としての立ち振る舞いが求められる。また本校で実施されている学外実習の期間が、この「保育内容（総論）」と重なっていることもあってこのような質問を実施した。「Q30. 保育系の職に就くことに前向きになった」、「Q31. 実習に対しての不安が減った」、「Q32. 他の授業に対する気持ちが高まった」、「Q33. 他の授業の関連性を感じた」、これらの質問の回答結果だが、平均値は全体平均値の「4.2」を下回る「3」代であり、中央値も「3～4」である。他と比べると若干低い結果となっている。特に卒業後の進路に影響される、保育系への就職については前向きになれなかった学生、つまり「1」または「2」と答えた学生は34%となり、学生全体の1/3は後ろ向き、または否定的であるということになる。この結果は筆者らにとって大きな課題となる。本研究の主たる目的の「保育の質の向上」以前の問題であるからだ。東京都の調査では資格取得後、保育関係の職に就かないものは20.3%いると報告している⁵⁾ように、保育士

不足の課題にも影響している課題である。まず、保育関係の職に就くことへの不安等を取り除くことは大きな課題である。他の質問項目では「Q32・33」の結果から他の授業科目への関連性を理解していないことがわかる。幼児教育学・保育学とは様々な領域からなる学問であるので、保育者とは多種多様の専門的知識や技術が求められている。そして、それらの専門知識や技術を横断的に学び、習得することが保育者養成校での学びとして求められている。しかし、この結果から学生は横断的な学びができない、できにくいということがわかる。単に担当している科目を学生に教えるのではなく、他の科目や専門的領域まで幅広く、横断的に学ぶことができるような授業展開が求められている。

「Q31」と関連させて「Q36～39」の結果もみていく。「Q36. 6月の教育実習でこの講義内容は活かした」、「Q37. それはどのような点ですか?」、「Q38. 9月の保育実習にこの講義内容を活かしたい」、「Q39. それはどのような点ですか?」という設問に対する自由記述での回答を図表6において内容をキーワードとして抽出し、数値の増減を捉えている。「Q36・37」と「Q38・39」では「教育実習で活かした」と「保育実習で活かしたい」という多少の設問の文言に違いはあるが、延べにして約2倍、80近い学生が参考になったと答えている。また学外実習に対する不安も高い結果となっている。しかし「Q38」の結果は高い。これには次に述べる授業展開と学外実習の時期にも大きく関係していると思われる。

図表9 授業展開と学外実習の時期

時期	授業内容	学外実習
4月～5月	筆者らによる講義 筆者らによる模擬保育	
6月上旬	授業なし	2週間の学外実習 教育実習Ⅱ（幼稚園）
6月下旬～7月	学生による模擬保育	
9月上旬		2週間の学外実習 保育実習Ⅱ（保育所）

上記の様に、学生による模擬保育が実施されるのは「Q36」の6月での教育実習Ⅱの終了後である。よって、6月での実習ではこの授業内容を活かしかれていない学生が多かったと思われる。その反面、他人や自分の模擬保育が終了した9月での保育実習Ⅱでは活かしたいと考えているため「Q38」の数値は高くなったのである。また増加したキーワードとして、「模擬保育」や「教員からの助言」という項目で増えていることから同様のことが推察される。

しかし、これらの質問項目と前述した「Q17～29」の質問項目のそれぞれの結果からは違ったことが推察される。それは学外実習に対する不安が減らず、また模擬保育の全てを学生は活かしかれていない点である。模擬保育を実施した時期と学外実習の時期は確かに影響しているが学外実習前

に筆者らも模擬保育を実施しているにも関わらず、数値や自由記述から表れていない。このことから、筆者らの模擬保育が高尚過ぎたのか、内容や説明、目的等が理解されていないのか不明だが、活かしきれていないのは事実である。そして6月の実習では不安のまま、取り組んでいる。それは筆者らの模擬保育を学生自身で実施できないと考えているからではないかと推測される。だからこそ実感がわかず、ただ受講した、聞いただけで終わっているのである。そして学生の模擬保育に移ると、他人の模擬保育は同じ学生が実施しているために、または部外者だからなのか、フラットな視点で体験することができるのである。だからこそ大いに活用できる。しかし、自分の模擬保育となると、懐疑的になり、また不安を感じ、後ろ向きになってしまう。これもまた今後の課題となる。自分自身で実践するということ、困難や不安に感じることの2点に対してこちらから何らかの対策を講じなければ100%、学生の身にならないということである。強いては本研究の主目的である保育の質の向上に影響が出てくるのである。

(4) Q34・35・40～42

「Q34. 教員2人の考えや保育観の違いを感じた」では回答の数値が低い。その理由を聞いた「Q35」の自由記述でも違いを感じず、似ているという記述やわからないという記述もあった。高い数値で答えた学生は「助言（アドバイス）」、「考え方」という2点で違いを感じると多く回答し、38もの記述があった。しかし、質問項目の内、考え方に違いや差を感じているが保育観に関しては記述がほぼないことから感じている。それは数値が低い要因でもあると考える。これから推察されることはそもそも、保育観そのものを理解できていない可能性がある。今回の授業内容では「保育観とは何か」ということは実施していない。むしろ他の「保育原理」や「教育原理」といった理論系の科目で教わる内容である。これらの科目は本校では1年次に履修済の科目である。しかし、学生はまだ理解しきれていない状況である。これは本研究のもう一つの主目的である「複数担任制（チーム制）」にも関わっている。前述したように、「複数担任制（チーム制）」における課題である保育者同士の連携の困難さは、その保育者同士の保育観にも起因している。しかし、保育観を理解していない状況で保育現場に就くと、他の保育者の保育観そのものを理解できず、そして受け入れることができないように感じてしまうと考える。現に保育士の退職理由において「職場の人間関係」が3番目（20.6%）になっているという調査報告もある⁶⁾。このように保育観の理解がないまま、保育現場に就くことで他の保育者に性格上の不一致といった違った見方を持てしまい、単純な人間関係という理由で退職してしまうケースがあるということである。他人の保育観に触れるということは、今回の授業で筆者らや多くの学生が実施した模擬保育に触れることと同義である。筆者らの模擬保育は活用するという点では低い結果だが、活用したいという意欲はある。また他人の模擬保育は大いに参考にしているのであるから、同様に考えることができれば、保育観を受け入れ、保育者同士の連携の向上につながると考えられる。

「Q40. この講義は教員2人体制がよいと思う」では回答の数値が高い。平均値や中央値も高く、

今回の授業では2人体制は大きな成果となった。その理由を聞いた「Q41」では図表7からもわかるように「筆者らの違う意見・助言」が功を奏したようだ。また「教員の保育観を学べる」と答えた学生も微少ながら存在した。この2点から保育観に対しての理解に何らかのきっかけになったように思われる。前述したように、筆者らや他の学生達の保育観に触れることが大切である。つまり、保育観に触れる機会を多く設定、提供することが重要であり、今後の保育者養成に求められると考える。現状としても幼児教育学や保育学に関する専門的知識や技術は学べても、他人の保育観に触れる授業や機会が少ないことを示している。学外実習などで保育現場にいる保育者から肌で感じ、保育観を学ぶ機会はあるものの、時間的にも短い。学生には保育観への理解を高めると同時に、多様な保育観に触れる機会を増やすことが求められる。

最後に、「Q42. この講義で卒業後に活かせる内容を思いつく限り答えてください」と質問した自由記述の回答が図表8である。ここでも多く記述されていたのが「模擬保育」である。次いで「保育観・保育のアイディア」、「言葉がけ・援助・導入などの技術論」である。この結果も前述の通りである。「模擬保育」は大きな成果となっている。学生にとって他人の模擬保育や自分の模擬保育が財産となり、今後を活用していくことだろう。そしてやはり学生は保育内容に直結することを求め、そして保育観に触れることで大きく学んでいるということである。保育観を学び、そして実践し、育む授業内容が必要ということである。

6. おわりに

今後の課題については、まず授業の運営方法や展開を一部変更していく。6月での学外実習ではこの授業を活かすことができていない学生が多かった。その点を改善するためにも一部変更していく。またアンケート調査の質問内容にも変更を加える。今回のアンケート調査では欠損値が高くなっている(欠損値:17)。これは質問の内容に問題があり、答える学生が理解しにくく、回りくどい質問の仕方をしてしまったからだと思われる。この点に関しても今後、改善を加えていくつもりである。

本研究での主目的は「複数担任制(チーム制)」、「模擬保育」においてだが、学生のアンケート調査からは、まず「模擬保育」が大きな学生の学びになり、成果であったと考える。筆者らの模擬保育や学生の模擬保育から得たものは多くあり、今後活かしていくことになる。しかし、学生自身で模擬保育を実践することに対して困難や不安を感じる点は課題である。この点に関しては如何にして学生の不安を取り除くかである。学外実習や保育系への就職に対しても同様である。そのため学生の実態を調査する必要がある。学生が何を考え、どう思っているかを具体的に調べていく。例えば、単に不安や困難に感じているが、どういった点なのか、先行研究も含め、調査していく。

次に「複数担任制(チーム制)」においてだが、「複数担任制(チーム制)」、「チーム」と聞くと「複数担任制(チーム制)」を一番に想起する。当然、「複数担任制(チーム制)」はチームで築いていくものではあるが、1つの学年も、乳児も幼児もそして園全体が1つのチームであることが望ま

しいと考えられる。そういった観点からも、学生の理解は低いものだと感じる。「複数担任制（チーム制）」に取り組む上で切り離せない「保育観」の問題がある。この保育観の理解度を上げることと、保育観に触れる機会を増やすことを今後の課題としたい。そして今回の研究では触れなかったが、「教育観」との関連や違いについても考えていきたい。

最後に今回の研究及び授業が保育の質の向上につながったかどうかだが、はっきり言って不明である。そもそも、対象である学生は未だ保育現場に就いていない。（2016年12月現在）そのため学生の保育の質は全くの不透明である。しかし、模擬保育という経験、筆者らの授業や助言、考え、そして筆者らや学生の保育観などが多くのものが、学生の糧となり、財産となり花開くことを願っている。そして保育の質が向上し続け、学生の保育観が影響し、他の保育者の保育の質の向上につながることも願っている。今後も本研究は続けると同時に、保育者養成からできる保育の質の向上に貢献したい。

注釈

- 1) 本論稿では保育現場を幼稚園・保育所・認定こども園を指す。
- 2) 本論稿では保育者を幼稚園教諭・保育士・保育教諭を指す。
- 3) 中平絢子, 馬場訓子, 高橋敏之. 保育所保育における複数担任制の利点と問題点. 岡山大学教師教育開発センター紀要, 第5号, 2015, pp.44-51.
- 4) 大阪総合保育大学総合保育研究所・保育指導のプロセス研究部会 2017発表予定。
- 5) 東京都福祉保健局「東京都保育士実態調査 報告書」2014.
<http://www.metro.tokyo.jp/INET/CHOUSA/2014/04/DATA/60o4s201.pdf> (参照2016-12-26)
- 6) 東京都福祉保健局「東京都保育士実態調査 報告書」2014.

この調査報告から退職理由は「結婚・妊娠（25.7%）」、次いで「給料が安い（25.5%）」となっている。

（おおしま けんご：講師）
（しばた けいいちろう：講師）